

細江カトリック教会だより 新年号

〒750-0016 下関市細江町 1-9-15

☎083-222-2294

☎083-222-0970

ホームページ <http://hosoechurch.sakura.ne.jp>

教会の一致と世界の平和

明けましておめでとうございます。

今年は「とり年」ですが、鶏（にわとり）は教会には親しまれている鳥です。ヨーロッパの古い教会の尖塔の上には、鶏が置かれています。時計がなかった時代には、鶏の鳴き声で目覚めて、一日を始めたのでしょう。聖書では、ペトロが主を否んで、鶏の鳴き声で自分の犯した罪に気づかされました。暁を告げる鶏の鳴き声は、世界にキリストによる救いを告げるシンボルとされ、私たちに神さまに向かって新しい歩みをするように呼びかけています。

ところで、2017年という年は世界の歴史に大きな痕跡を残した「宗教改革」から500年の節目の年です。特別の年として、それに因んだ催しが世界各地でさまざまに企画されています。

宗教改革の発端となったのは、1517年10月31日、ドイツのヴィッテンベルクという町の教会の扉に、マルティン・ルターという一人の修道者が当時の教会の悪弊に対して95箇条の質問状を公開したという出来事でした。

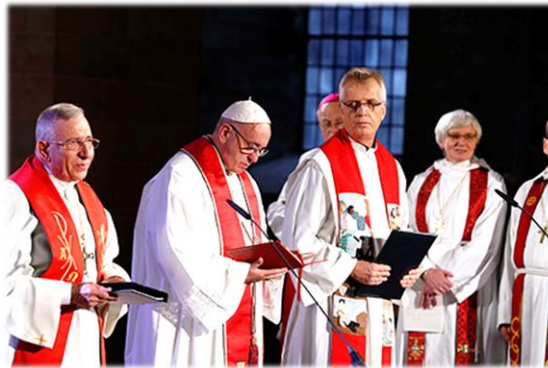
教皇フランシスコも、この記念の年の開幕を告げるプロテスタントとカトリックの共同の祈りの集いに参加されました（写真は昨年10月31日、宗教改革記念日にあたってスウェーデンのルンド大聖堂で行われた世界ルーテル連盟とカトリック教会の共同の祈り）。確かに宗教改革は教会の分裂という痛ましい結果をもたらしましたが、今日ではカトリックの歴

史家たちもルターを「福音の証人」として再評価し、宗教改革によってこそカトリック教会も自らの使命に目覚めることができたのだと認識するようになりました。これについて、両教会の共同委員会が長年の対話の実りとして、『争いから交わりへ——ルーテル教会とカトリック教会が2017年に共同に行う宗教改革記念』（教文館）という文書を公表しています。

現代世界はまさに紛争と暴力によって引きさかれ、過去に類を見ないほどの多くの難民が故郷を追われ、さまよっています。この世界に、教会はキリストによるゆるしと和解を告げ、平和をもたらすために遣わされています。しかし、その教会自身が教派に分裂し、互いに反目し、中傷しあっているならば、それは矛盾でしかないでしょう。今日ほどキリスト者の一致が必要とされる時代はありません。

その意味で、すでに100年以上にわたって毎年行われてきた「キリスト教一致祈祷週間」（1月18日～25日）は、今年は特別の重要性を帯びています。日本キリスト教協議会とカトリック中央協議会が準備した今年のテーマ「和解——キリストの愛がわたしたちを駆り立てています（2コリント5・14-20）」（小冊子が刊行されています）を黙想して、この一週間だけでなく、年間を通して祈りましょう。また下関ブロックでは、1月19日（木）10時から彦島教会で、合同の祈祷集会を行うことになっています。ふるってご参加ください。

百瀬 文晃 神父



待降節黙想会 12/11 (日)



待降節黙想会を終えて

待降節第三主日、呉教会より金起瑩^{きむぎよん}神父様を黙想指導にお迎えしました。創世記 25 章～33 章をテキストに、“信仰の先人はどのように神と出会い救いに導かれたか”を、エサウとヤコブの双子の兄弟の生き方を通して学びました。

アブラハムから継承する長子権をめぐる親子兄弟の心模様は、4000 年以上の時を超えて現代の私たちも数々気づかされる物語です。聖書解説の端々に金神父様のベースにある文化や歴史、感情を重ねながら、ゆっくり聖書を味わうひとときとなりました。

疲れ切った空腹の身にレンズ豆の煮ものはどれほど魅力的な事か、目前の美味しいものに釣られ、前後の見境のない兄エサウは私の中にも住み着いています。私も現実の苦しみから逃れたい一心で、何度その場限りの誘惑に忍耐を忘れたことでしょうか。日常の私をアレコレ思い出し、講話の初めからいきなり振り返りのためのヒントをいただきました。

弟ヤコブは誇り高き神の民としての生き方を忘れ、人間的な権力への欲望から親族を裏切って逃亡生活を送ります。母の胎内にあるときからの不仲が和睦に導かれるプロセスから読み取るべきは、「神が共におられる」ことでした。石を枕に野宿した時から 20 余年、伯父のもとで働いた長い年月は犯した罪の重さゆえであり、自然をじっくり観察しあらゆることに気づく賢さを養う時間でもありました。罪を認め兄のもとに帰る旅の途中では、天使に腿の関節を折られ歩くことも困難

になります。引きずる脚は神のはからいであり、和解のために自らへりくだり兄の前にひれ伏す態度へと変えられました。読み進むにつれ、この日のテキストの一つひとつの場面から「神が共におられる」ことを改めて心に留め、私たちも自分自身を見つめなおすこととなりました。

講話の後も、ミサの中でも聖体顕示式でも、繰り返す「神が共におられる」ことを忘れることが罪であると話されました。そして単に悔い改めに留まらず、放蕩息子のように父のもとに帰らねば意味がないと力強く話されました。私は、果たして共にいてくださる主イエズスの体験を大切に心に刻んでいるだろうか。たびたび襲われる不安や迷いの闇の中でうろたえるだけの薄い信仰がはっきりと見えてきます。救いの実感がないのはやはり私の心の有り様で、私が神様に背を向けているからだ、身に沁みて感じ目が覚める思いでした。

赦しの秘跡後のホールでの茶話会では、5 歳の時に殉職でお父様を亡くされ、3 歳上のお兄様とお母様の家族三人で懸命に乗り越えてこられたご自分の生い立ちをしみじみ話されました。兄弟間の確執や、他者からの思いがけない援助に支えられた思い出も話して下さいました。それは金神父様にとっての「神が共におられる」体験の分かち合いであり、釜山教区からはるばる派遣され熱心に宣教しておられる金神父様の使命感を垣間見るようでした。午後のプログラムにもたっぷり時間をかけた一日を終え、私たちも励まされ温かい気持ちになることができました。

私はこの待降節の初めに目にした、洗礼者ヨハネの厳しい言葉にたじろいでいます。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。信仰者としての自分の至らなさを嘆き沈んでいた気持ちですが、この黙想会を通して「神が共におられる」ことを思い起こしたことで、新しい年に向けて少し道が開けてきたような気がしています。

典礼委員：塩谷朋子



* 黙想会を終えて、茶話会。

ボランティア活動 12/16~17

熊本 益城町へ



* ボランティア参加者たち。

1日目の夕方、震災後個人的に支援をされている方の仮設テントで、準仮設住宅の家族と細江教会3名彦島教会7名(内中学生ルカちゃん)ほか総勢20人が集い、励ましの夕食会が開かれました。その中でも小学生3姉妹の屈託のない笑顔で、一同がなごみしました。(支援者の方々には、私たちが持参した手作りおかずが大好評)

翌朝、益城町災害ボランティアセンターにて社会福祉協議会の指導の元、皆が各チームに分かれ、それぞれ自分の出来る範囲の仕事に従事しました。被災者に「寄り添う」という気持ちを大切にしながら、救援活動をするということでしたが、被災者のプライバシーの保護や寄り添うことの大切さなど、活動上の留意点も多くありました。

災害から約8カ月経過していますが、まだまだ復旧の手は小さな所へは及ばず、助けの必要はたくさんあります。現状を実際に自分の目で見て、災害の怖さを思い知らされました。

当日は年末にもかかわらず、全国各地から約100余名の人が同じ思いで駆けつけ、積極的に参加する姿は、さすががしさを感じました。

短時間ではありましたが、一期一会のふれあいの大切さを心に、今後も機会があれば参加したい。そして、少しでも「神の愛を証しする人」に近づきたいと思いました。

近藤 豊之



* 女性陣は、青森から送られてきたりんごを仮設住宅へ、一軒一軒配りました。笑顔と共に。参加された高校生や若い女性たちの無償の愛を感じて、嬉しかった。 近藤 克美

新年の抱負



酉の年がめぐってきて

昭和20年は、酉年だったのねと、終戦2か月後に生まれた私は今さらのように思う新年の始まりです。

十年ほど前、同級の友人と旅をしたとき、ある古い学校の廊下に貼ってあった注意書きを読んで、「ほら、『廊下を走らないで!』って書いてあるわよ」と指さしました。ユーモアあふれる彼女が、廊下を老化にかけて言っていることに気付いて大笑い。

確かに、身体的には走ってきていることは事実ですし、鶏のように落ち着きなくばたばたしていることも認めます。

でも、神さまと同じいのちを恵まれたことに思いを馳せると、生き生きとした静かな喜びに満たされるときもあります。常にみずみずしい泉のような賜物・・・これからは、それを意識し気付かせていただく恵みを求めていきたいと思います。日々新たにされることを信じて。

マリア・フランシスカ・雅子



幼児洗礼を受けた私は、信者になって今年で36年になります。今までたくさんの神父様、シスター、教会の方々とお出会ったことは、私の人生に大きく影響しています。良い時も悪い時も、必ず神様と共に、誰か

と一緒にいて、祈ってくれました。神様が全ていように導いてくださったのだ、そう思うと神様を信じて生きてきたことで、人生がより豊かで恵み深いものになっていると感じています。

学生時代に会った神父様がおっしゃっていました。「あなたには世界中に“教会”という家があります。どこにいても帰る家、迎えてくれる家があります。困ったことがあれば教会へ行きなさい」その言葉は、県外へ引っ越しても、海外へ旅しても、教会を訪れることで、どんな時も安心し、心が強められました。

いつも神様に守ってもらってばかりですが、今年はひとつ、心掛けようと思っ
てことがあります。それは、神様の語りかける言葉をいつも聴くようにしようということです。福岡の教会へ行った時、説教の中で「神様の言葉は無視してはいけません。神様はいつもあなた方がすべきことを語りかけているのです。それを聴く心を持つべきです」と、話されていたことが印象に残ったからです。リントホルスト神父様にも「若いあなたたちは神様のためにすべきことがあるはずですよ」と、よく声を掛けていただきました。

今まで私自身何をすべきかわからなかったのですが、今年は真正面から対話してみようと考えています。

加藤 明子(旧姓 増田)



年男

“年男”ということで原稿を頼まれ、書くことになりました。

高校を卒業し、早いもので6年が経とうとしています。鉄工所で働いていますが、今では仕事も任せられるようになり、自分が行っているプレスは、一つ間違えれば大きな怪我に繋がる業務です。いつも緊張感を持って仕事をしています。

プライベートではアームレスリングにはまって、昨年の12月には全国大会に出場する事が、できました。これからも、仕事にアームレスリングに頑張っていきたいと思います。

白濱 信

12月25日(日)

クリスマス おめでとうございます!

この日に受洗された

フランシスコ・ザビエル松原秀樹さん

おめでとうございます!

「生徒たちに後押しされて・・・洗礼の決心を」と、話されました。

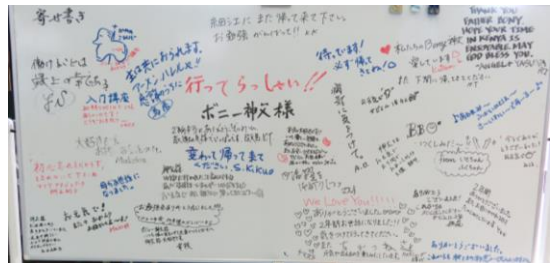


*サビエル高校の合唱団が祝福に駆けつけて、美しい歌声を聴かせてくださいました。

ボニー神父さま、 行ってらっしゃい!



*送別会で、
挨拶される
ボニー神父。



*みんなで寄せ書き“さよならメッセージ”。
帰ってきてね〜!。お元気で!
See You Again! We love you! の言葉を添えて。

編集後記

・シリーズの地区だよりは紙面の都合上、来月号になりました。ごめんなさい。

・熊本被災地を見て、各地で起こった災害を新たに思い巡らし、継続的に東日本大震災へ支援している方のことも、思い浮かべていました。その方には、きっと神さまの愛が注がれているんですね。